



第4回九州ミッドアマチュア選手権競技

競技報告 (2014/10/8)

写真と記事 : M. Kikutake

通算1アンダーの143

竹本健太 (北九州) が初優勝

実力者の荒川英二 (福岡雷山) にP.0で競り勝つ

九州ミッドアマチュア選手権は7、8日の2日間、佐賀県唐津市の佐賀ロイヤルゴルフクラブ(6920㍍、パー72)で行われ、通算1アンダー、143で並んだ2人によるプレーオフの結果、32歳の竹本健太(北九州)が荒川英二(福岡雷山、43歳)を下し、初優勝した。

プレーオフは3ホール目、ピン30㍍につけてパーディーを奪った竹本が、パーの荒川に競り勝ち、自身初めての連盟主催競技タイトル獲得になった。

荒川、好調に首位発進も…

選手権には各県地区予選通過者ら133人(欠場11人)が出場。2日間とも風はややあったものの、晴れて気温21度前後と好コンディションの中で行われた。

初日、トップに立ったのは荒川。各選手たちが速いグリーンに苦戦するなか、5バーディー、2ボギーの3アンダー、69で回り、2位の五十森達哉(福岡雷山)に1打差をつけた。さらに2打差のイーブンパー、3位に佐藤憲一(大分、63歳)がつけ、竹本は荒川に5打差の6位タイの発進だった。

最終日の決勝ラウンドは予選を通過した80位タイまでの85人が進出。荒川は前半1つスコアを伸ばし、好調に折り返した。ところが、追う五十森が足踏みし、佐藤も79をたたいて後退。その間に、最終2組前の竹本が69のベストスコアで回り、通算1アンダーでホールアウトした。

荒川は後半に入ると17番まで2バーディー、3ボギーの出入りの激しいゴルフながら、竹本に2打差をつけていた。それが、最終18番で第1打を曲げて木の根元のアクシデント。このホールをダブルボギーとし、プレーオフにもつれこんでいた。

通算1オーバー、145の3位タイに今村大志郎(麻生飯塚、35歳)と五十森の2人。さらに1打差の5位に平井皇太(奄美、31歳)で、シニア勢も榎隆則(大分中央、55歳)が通算6オーバーの7位タイ、山浦正継(志摩シーサイド、62歳)と佐藤が7オーバーの9位タイと健闘した。前回優勝の大塚覚(鹿児島国際、49歳)はこの大会不調で、52位タイに終わった。

今年4回目を数えた九州ミッドアマだが、第1、2回に続き3度目のプレーオフでの決着。荒川は1、2回大会を制しているが、逆転で2位に終わった昨年を含め、4大会とも優勝争いに絡んでいる。



日本ミッドアマは11人が出場権獲得

この試合の結果、第19回日本ミッドアマチュア選手権(11月19日~21日、香川県・坂出CC)は7オーバー、151、9位タイまでの11人(シード選手含む)が出場権を得た。



先輩・荒川から盗み取った技術

“恩”を返した竹本健太

「まさか優勝するとは思ってもいなかった。(荒川が初日から走っていることだし)日本ミッドアマ出場権が狙いだったんです」。荒川とのプレーオフに勝利し、優勝カップを掲げた後、竹本健太(北九州)はちょっと照れを含んだ表情でこう話した。

思いがけないタイトル!?!…初日が終わって荒川とは5打差あった。最終日は最終組の荒川の2組前でのラウンド。「気持ち的には楽だった」と竹本だ。練習や初日のラウンドを通じてグリーンの形状を見、高速で厳しいピンポジションを頭に叩き込んだ。「とにかく、手前から攻めようといったのが、ずばりはまった」。

気持ちの余裕は、ラウンド途中で、「身体が突っ込むというアイアンの癖が出ていたのを修正することができた」というほどで、「セカンドがほとんどいいところについてくれた」という結果につながった。ホールアウトしてみると、この日ただ1人のアンダーパー69をマークして首位に立ち、最終ホールで崩れた荒川とのプレーオフにもつれ込んだのだ。

そのプレーオフでも自分を見失うことはなく、圧巻だったのは勝負を決めた3ホール目だろう。3番(350ヤード、パー4)のセカンドは残り90ヤード。竹本は52度のウェッジでピタリ、30ヤードにつけて荒川に引導を渡し、3度目の出場場ででっかいタイトルを手にした。

実は荒川とはプライベートでもよく一緒にラウンドする仲なんだという。相手は九州ミッドアマ界の第一人者。「一緒にラウンドで何か得ることはあったの?」と聞くと、「荒川さんのアイアンショットを見て、自分のぶれる癖、欠点があつめた」と竹本だ。

アイアンの精度を高めるにはどうしたらいいか。荒川は小柄だががっちりとした体格で、ショットのぶれも少ない。その技術から体幹を鍛える大事さを学んだという竹本は、今年の冬場からシーズンを通じて、暇があればバランスボール、チューブ牽引などに取り組んできた。いわば、荒川から盗んだ「アイアンの精度」という技術を自分のものにし、奪い取ったタイトルでもあった。

三重県出身で、親戚が営む不動産会社(飯塚市)に就職。ゴルフは「父親がやっていたので、見よう見まねで始めた」という。24歳のころだ。以来、クラブチャンピオンを4回取っているが、九州大会規模でのタイトルは初めて。次は、初めての日本選手権挑戦になるが、「自分のゴルフは、飛ばすよりもまっすぐ確実にフェアウエーをキープするゴルフ。自分のゴルフが(全国で)どこまで通用するか試したい」と目を輝かせていた。



(C)GUK



(C)GUK

鬼門の18番。逆転負けの荒川英二

〇…昨年に続く逆転負け。それも最終18番に待っていた鬼門。普段は明るく、人当たりのいい荒川英二がさすがに悔しそうに表情をゆがめた。

2打差の余裕を持った最終ホール(パー5)。その実力、キャリアから誰がこうなることを予想していただろう。第1打を左に引っ掛けて木の根元で、2打は出すだけ。3打をグリーン手前まで刻み、4打で乗せたものの、10ヤードの難しいライン。結局3パットしてプレーオフにもつれ込んだ。

「今日はパープレー狙いでいったんだけど…」と荒川だが、明らかに気落ちしていたプレーオフは、竹本の勢いが勝った。

新しく始まった大会で1、2回大会をプレーオフの末に制した。昨年も17番まで首位にしながら、最終ホールでダブルボギーをたたき、3連覇を逃した。

しかし、4大会を毎回、優勝争いを演じている荒川だ。今回、逆転負けを喫したとはいえ、その実力、存在は色あせていない。出来ることなら、まだ取っていない日本選手権で、リベンジを果たして欲しいものだ。